



ローマ・カトリックと 宗教改革 500年

カトリック中央協議会



宗教改革500年

今年は、マルティン・ルターが『九十五条の論題』を発表(1517年)してから500年の記念年です。この16世紀の宗教改革は、キリスト教の信仰改革を図ったものでしたが、ヨーロッパ近代という時代の社会と政治の変動に巻き込まれ、結果的にキリスト教会に分裂をもたらし、プロテスタント諸教会を生み出した出来事でした。

マルティン・ルター

Martin Luther

1483年～1546年

1517年10月31日
『九十五条の論題』
宗教改革運動の始まり



宗教改革その後？

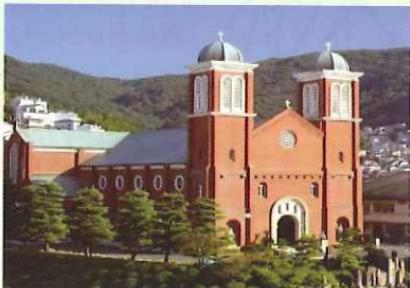
多くの人は、この事実については、歴史の教科書で学んだでしょう。けれども、知識はそこで止まつてはいないでしようか？ 分裂したキリスト教は、その後どうなつたのでしょうか？ …歴史はこの500年の間も動いてきたのです。

2017年、長崎からの新たな出発

2017年11月23日に、日本のカトリック教会とルーテル教会は、長崎のカトリック浦上教会に集まる事を決断しました。宗教改革後500年を記念し、「祈り」と「対話」において過去から未来へ導かれ、現在の姿を証しすることが目的です。「平和を実現する人は幸い」において、世界の平和と和解の実現に向かって歩み出す現代の両教会の姿を示します。

長崎は、キリスト教の弾圧と迫害を経験した町。そして20世紀の世界の悲劇を象徴する原爆被爆の地です。受苦と堅忍、信仰と希望と復活の町、長崎。この地を日本のカトリック教会とルーテル教会は、平和を実現する未来への歩みの出発点とします。

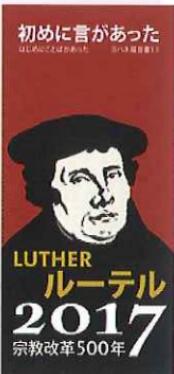
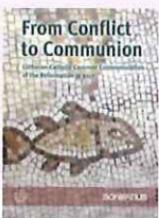
長崎県長崎市 カトリック浦上教会



世界のカトリック教会とルーテル教会による宗教改革500年記念

ローマ・カトリック教会とルーテル教会は、宗教改革を共同で記念するという過去に前例のない取り組みを世界各地で進めています。かつて激しく対立した両者が、いまや一致と協力のためにひとつのテーブルを囲み、その声を世界に届けようとする気運が高まっています。

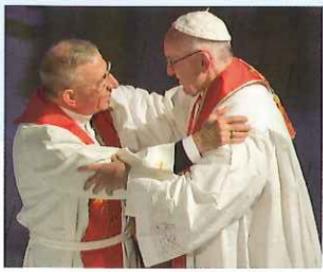
2013年共同文書
"From Conflict to Communion"
発表



ルンド声明

2016年10月31日には、ローマ・カトリックのフランシスコ教皇と世界ルーテル連盟代表のユナン議長が、この記念年の幕開けとして、世界ルーテル連盟発祥の地であるスウェーデンのルンド大聖堂において共同の記念を行いました。「わたしたちは神に祈ります。ローマ・カトリックの者たちとルーテルの者たちが、イエス・キリストの福音を共に証しし、神の救いの働きを受け入れるべく人々を招くようになることを。わたしたちは共に奉仕の務めに立って、特に貧しい人々のために、人間の尊厳と権利とを高め、正義のために働き、あらゆる形の暴力を斥けることにおいて共に奉仕に当たることができるよう、靈の導きと勇気と力を神に祈ります。尊厳、正義、平和、和解を切に求めているすべての人々に、わたしたちが近づくようにと神は呼びかけておられます。…暴力や過激主義を終わらせるよう、わたしたちは声を挙げねばなりません。…知らない人々を受け入れ、戦いや迫害のゆえに逃れることを強いられた人々に助けの手を差し伸べ、難民や亡命を求める人々の権利を守るよう、共に働くことを強く求めます」

(ルンドにおける共同声明より)



2016年10月31日 スウェーデン・ルンド
カトリック・ルーテル共同主催礼拝



教会一致運動(エキュメニズム)の進展

17～20世紀初めまでは、ローマ・カトリックとプロテスタント諸教会は、自教派の正当性を主張し合い、互いを無視するような時代が続きました。キリスト教が超教派で対話と和解、一致を目指す「教会一致運動」は、プロテスタント諸派が1910年に開催したエジンバラ世界宣教会議から始まったといえます。プロテスタントと正教会が加わる世界教会協議会(WCC)は、この会議の精神を受け継いで、長年、教会一致運動に取り組んでいます。ローマ・カトリック教会もこれに呼応し、第二バチカン公会議（1962年～1965年）で『エキュメニズムに関する教令』を布告しました。パウロ6世教皇は、1965年にコンスタンティノープル総主教アシナゴラスとともに、1054年以来続いていた東西教会相互の破門宣言を取り消しました。

ルーテル世界連盟とローマ・カトリック教会の間では、1967年よりさまざまな対話が重ねられてきました。1980年の『アウグスブルク信仰告白』450周年と1983年のマルティン・ルター生誕500周年記念の際には、ローマ・カトリック教会とルーテル教会は、ルターの中心的関心事を共に容認・支持しました。そしてそれらの対話の実りとして、1999年には、教理論争の中心にあった義認問題の理解にはもはや齟齬^{そご}はないとする歴史的な『義認の教理に関する共同宣言』(邦訳2004年)が調印されました。

2004年『義認の教理に関する共同宣言』日本語訳公刊を機に、ルーテルとローマ・カトリックの合同礼拝が催されました。



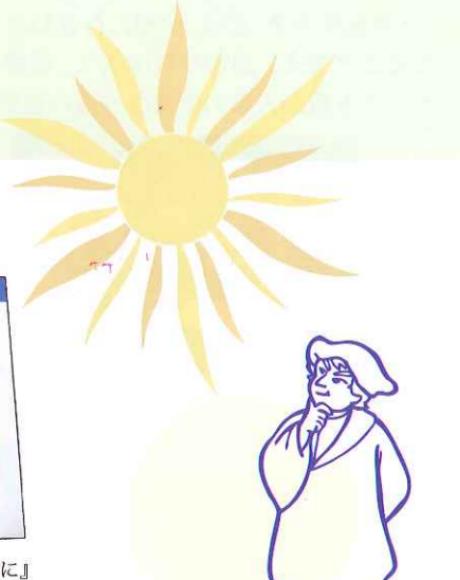
第二バチカン公会議『エキュメニズムに関する教令』50周年記念の合同礼拝が2014年に催されました。

日本においても、日本福音ルーテル教会とローマ・カトリック教会の間で1984年から「ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会」において対話が続けられています。その対話の実りとして『カトリックとプロテスタント——どこが同じで、どこが違うか』(教文館、1998年)が編纂され、また2014年には、第二バチカン公会議『エキュメニズムに関する教令』の50周年を記念して、ローマ・カトリック教会、日本福音ルーテル教会、日本聖公会による合同礼拝も行われました。2017年の宗教改革500年記念の準備として、一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会による報告書『争いから交わりへ』(2013年)も翻訳・出版されました(2015年、教文館)。

「エキュメニズム」(教会一致の推進)という言葉は、「家」を意味するギリシア語「オイコス」から派生する「オイクメネー」、すなわち「人の住む全世界」に由来し、全地に広がっていく教会を示します。「公会議（シノドス・オイクメニケー）」とは「全世界会議」であり、民族や国家的区別を越えた、キリストにおける人類共同体建設を展望しています。「エコロジー」も同じで、フランシスコ教皇は、回勅『ラウダート・シ』の副題を「共に暮らす家をたいせつに」としました。



回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』
フランシスコ教皇(著)



1. 近代の幕開け

中世末期、教会は分裂(1378～1417)し、その権威は失墜していました。他方、この時代は新しい時代への過渡期でもありました。新大陸の「発見」、ビザンツ帝国滅亡(1453)、イベリア半島のレコンキスタ運動終結(1492)、グーテンベルクによる活版印刷術の発明、コペルニクスによる自然科学の台頭です。またルネサンス人文主義という、人間性の追求とその尊厳の自覚を促す思想が広がっていました。

そんな中、キリスト教会においてもすでに15世紀には、教会改革が勢いを増していました。免償状買悪弊改善や聖書の多国語翻訳、また「デボチオ・モデルナ(新信心)」と呼ばれる信徒運動などです。ルターが入会したアウグスティヌス隠修士会も改革修道会の一つでした。宗教改革の先駆的な運動も、英國のウィクリフ(1320年頃～1384年)やボヘミアのフス(1369年頃～1415年)、イタリアのサヴォナローラ(1452年～1498年)などにより始まっていました。



2. ルターの問題提起

1517年、マルティン・ルターが『九十五カ条の論題』において、ドイツにおける免償状販売の不当を訴えつつ、当時のローマ教会のあり方への討論を呼びかけたことから、ドイツの宗教改革が始まりました。彼の主張の根本は、「人が救われるのは、免償状を買うことによってではなく「信仰によってのみ義とされる」(信仰義認)ことでした。

- ・第37条「真のキリスト教徒はだれでも、生きている者であれ死んでいる者であれ、免償状がなくとも彼自身への神からの賜物として、キリストと教会のすべての財宝にあずかっている」。

- ・第62条「教会の真の宝は、神の栄光であり、恵みである最も聖なる福音である」



ルターは聖書をドイツ語に翻訳し、
発展中の印刷術によって普及しました。



3. ルターの宗教改革

ルターは、人間の外面的なわざではなく、キリストの贖罪のわざに示された神の恵みとあわれみを全面的に受けとる「信仰のみ」において人は救いにいたるという「福音主義」を唱えました。この福音主義は、その源泉と正統性を「神の言葉」である「聖書のみ」に求めます。そこから教皇の権威や教会の伝承、ローマ教会の既存の組織、教会秩序への改革が訴えられます。

こうした変革は、ドイツに大きな混乱をもたらしました。しかしルターの呼びかけはローマ当局と司教たちには聞きいられられず、教会と結ばれて政治的権威を代表する神聖ローマ皇帝カール5世は、1521年にヴォルムス勅令を発してルターを異端と断定し、追放しました。これに対してルターは、破門状と『教会法大全』を焼き、ザクセン選帝侯フリードリヒの保護のもとで、聖書のドイツ語訳を完成させました。また主著である『キリスト者の自由』が活版印刷により流布しました。

1517年、ヴィッテンベルク大学教授のマルティン・ルターがこの聖堂の扉に『九十五カ条の論題』を提示したことが宗教改革の口火を切ることになりました。



1521年にヴォルムスで神聖ローマ帝国会議が開催され、ルター追放が決定されました。ルターは自説をまげず、教皇と公会議の権威を認めないと明言し最後に「ここにわたしは立つ」と言ったとのことです。

4. 宗教改革の拡大

ドイツにおけるルターの改革運動に並行して、スイスでは、ツヴァイングリやカルヴァンがジュネーブを中心に改革運動を進めました。それは、オランダ、イギリス（清教徒〈ピューリタン〉）、スコットランド（長老派〈プレスビテリアン〉）、フランス（ユグノー）など、ヨーロッパ各地に拡がっていきました。また、幼児洗礼を否定する再洗礼派〈アナバプテスト〉の運動もスイスから起こりました。さらにイギリスでは英國国教会〈アンガリカン〉が成立しました。

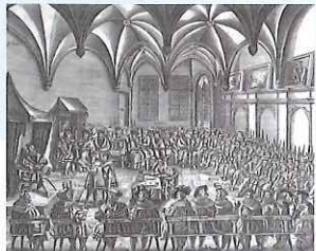
ジョン・カルヴァン（1509～1564年）は、ジュネーブ市の宗教改革を強力に指導しました。改革派教会・長老主義教会を方向づけ、大きな影響を与えました。



カトリック教会内でも改革が進んでいました。イグナチオ・デ・ロヨラ（1491～1556年）が創立したイエズス会の活動はその一例です。

5. 宗教改革の政治化

このころヨーロッパでは、諸侯や王が神聖ローマ帝国から離れた自前の国家を形成しつつありました。宗教改革運動は、この社会的・政治的過程、すなわち帝国からの独立をもくろむ諸侯たちの思惑に巻き込まれていきます。1555年のアウグスブルク宗教和議において「領主の教派は領民の教派」が原則となり、神聖ローマ帝国に依拠するローマ教会の普遍（カトリック）主義の代わりに、ルーテル教会は勃興するナショナリズムに結びつくことになりました。



ドイツの国家教会的状況は1918年の君主制の終焉で終わりましたが、北欧では弱められた国家教会制がいまだに続いています。

1555年にアウグスブルクで開催された神聖ローマ帝国議会において、ドイツ・中欧地域におけるルター派容認が決議されました。

6. 宗教戦争

封建時代末期の矛盾が深まる社会的・政治的状勢において、宗教改革はまた反封建闘争という社会改革と結びつくこととなります。ルターは、武装闘争に反対しましたが、キリスト教信仰をめぐる対立は、戦争にまでいたりました。没落しつつあった騎士たちが大領主に起こした騎士戦争（1522年）、また領主に対する不満をつのらせる農民がルターを支持して蜂起したドイツ農民戦争（1524年）などです。

皇帝カール5世は、一時ルター派を公認しましたが、再び否認したため、ルター派諸侯は結束して皇帝に抗議し、そこから「抗議する者=プロテスタント」との名称も生まれました。ローマ教皇とカトリック教会を支持する諸侯は結束し、シュマルカルデン戦争（1546～47年）という宗教戦争が引き起こされ、それはフランスでのユグノー戦争（1562～98年）、17世紀前半の三十年戦争（1618年～1648年）にまで波及します。



現代のルター像

ルターが異端者であり、西方教会の分裂の責めを負う者と見る時代は過ぎ去りました。現代カトリックのルター研究においては、ルターが抱いていた真の宗教的な意図を理解することにより、彼がプロテスタント、ローマ・カトリック共通の教会博士であると認識されています。

ルターによる宗教改革の意図とは、福音によるキリスト教の再生でした。恵みの神、神の義、信仰について問うことで、停滞していた当時の教会に対して、キリスト教信仰に関するより核心的で実存的な問いを提起したのです。ヨーゼフ・ロルツというカトリックの学者は、ルターは「本来のカトリック的なもの」に戻ろうとしたのだと言います。

ルターの根本的な意図が「福音主義的であると同時にカトリック的」であろうとしたものであるならば、ローマ・カトリック教会は、2017年の記念を自らのアイデンティティの深化・再発見の機会とすべきでしょう。



現代のローマ・カトリック教会のエキュメニズム

ローマ・カトリック教会の教皇たちは、第二バチカン公会議以後、教会一致への強い責任感を示してきました。「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具」(『教会憲章』1項)だから。それは「すべての人を一つにしてください」(ヨハネ17・21)とのイエスの言葉にさかのぼる使命です。

- ・「すべてのキリスト者間の一致を回復するよう促進することは、聖なる第二バチカン公会議の主要課題の一つである」(『エキュメニズムに関する教令』1項)。
- ・「キリストを信じる人々は、ともに結ばれて殉教者たちの跡を追おうとすれば、分裂したままでいることはできません。あがないの秘義を空洞化しようとする世界の動きを、真に、また効果的に阻みたいなら、十字架についての同一の真理を、手を取り合って告白しなければならないのです」(ヨハネ・パウロ2世教皇回勅『キリスト者の一致 Ut Unum Sint』1995年、1項)。



1964年11月21日
第二バチカン公会議
『エキュメニズムに
関する教令』公布



2017年10月31日
宗教改革から500年
もはや争いなどなく、
一つとなるために

日本福音ルーテル教会・日本カトリック司教協議会 宗教改革500年共同記念『平和を実現する人は幸い』

日本のカトリック教会とルーテル教会は、2017年の11月23日に、長崎のカトリック浦上教会にて共同の記念の集いを催します。

現世界の共通の経験は、社会と文化、宗教の混乱と脅威、そして暴力の爆発でしょう。キリスト教のネットワークは、今こそ、国境、民族、人種、宗教を越えて、愛の福音、正義と平和、自由など、真にグローバルな価値を示さねばなりません。

「神」という言葉は、現代人には意味の分からない言葉になりつつあるかもしれません。ルターの改革は、当時の社会と教会に「福音」が見えなくなったことへの異議申し立てでした。それゆえ、今年の記念の課題は、分断されたこの世界において、今一度共通の救い主イエス・キリストのもとに集い、いつくしみの神の証人となる歩みを始めるでしょう。1517年は、分裂の始まりでしたが、2017年は、一致への道を歩み始めるスタートです。

「カトリック」とは、全地に行きわたる神の愛、キリストの新創造の協働者になることです。迫害から復活へ、破壊から平和への道を歩んできた長崎から、キリスト教が人類の新たな一致の道標となるように、共に祈りましょう！



2016年12月18日 カトリック浦上教会にて
連帯の呼びかけ
ヨアヒム・ガウクドイツ連邦共和国大統領
日本カトリック司教協議会会长 高見三明大司教
日本ルーテル教会副議長 大柴譲治牧師



2017年9月20日 発行

発行 カトリック中央協議会

製作 宗教改革500年記念行事準備委員会

監修 カトリック中央協議会エキュメニズム部門

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館内

Tel. 03-5632-4411(代表)

